

刊行によせて

昨 2014 年度より新装となった『年報』の 2015 年度版をお届けいたします。

神奈川大学日本常民文化研究所では、昨年度から研究所本体と研究所の一研究部門である国際常民文化研究機構の 1 年間の研究活動をより広く社会に発信する媒体として、両機関の活動内容を一元化した『年報』を刊行することになりました。2015 年度も所員をはじめ各研究員においては、事業計画に沿った活動を積極的に推進いたしました。

現在、日本常民文化研究所の事業は、研究所本体、国際常民文化研究機構、さらに、研究所付置の非文字資料研究センターの 3 機関がそれぞれの特性を活かしながら活動を進めています。まず、国際常民文化研究機構は、日本常民文化研究所を基幹として、2009 年度から 2013 年度まで文部科学省により「共同利用・共同研究拠点」の認定を受け、「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」（現「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」）を実施しましたが、新たに 2014 年度から 2019 年度まで再認定され、その事業は現在も続けられています。また、非文字資料研究センターは、2003 年度から 2007 年度まで、文部科学省に採択された 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」と題する課題を、本研究所を主体とする 3 機関（日本常民文化研究所、大学院歴史民俗資料学研究科、大学院外国語学研究科中国言語文化専攻）で遂行しましたが、終了後、2008 年度より後継組織として開設された非文字資料研究センターで非文字資料の研究に取り組んでいます。

それらの 3 機関のうち、日本常民文化研究所は、民具の収集・分類、古文書の収集・整理、漁業史研究など、日本における常民社会の多様な領域を所員が共同で研究するのに対し、国際常民文化研究機構は、「海域・海民史の研究」「民具資料の研究」など常民文化の研究に関する 4 つの課題を設定し、「共同研究（一般）」と「共同研究（奨励）」として広く学外から公募し、採択された研究グループに所員も加わって共同で研究を進める形をとっています。国際的な学術交流事業もこの国際常民文化研究機構が主に担うこととなります。さらに、非文字資料研究センターは、図像資料、身体技法、景観・環境の 3 つのテーマを設定し、学内外の研究者が共同して「非文字」研究に特化した研究を行っています。

このように、3 つの研究機関が関連性をもちながらも、それぞれ研究の棲み分けを行い、相互の研究が進展するよう各事業に取り組んでいます。ただ、非文字資料研究センターについては、付置とはいえ独自に研究活動を行っており、その研究成果も年度ごとに『年報』を刊行しています。したがって、本研究所の『年報』には、研究所本体と国際常民文化研究機構の 2 機関の活動内容、及び非文字資料研究センターについては刊行物の紹介が掲載されることとなります。

そこで、本巻に収めた 2 機関の主な活動の内容と成果を紹介すると、下記ようになります。

研究所本体の活動では、現在進行している「海域・海村の景観史に関する総合的研究」と「瀬戸内海の歴史民俗」の 2 共同研究の進捗状況や、前者の共同研究に関して開催された第 19 回常民文化研究講座「シンポジウム『漁場図』を読む」の記事が収載されています。この 2 共同研究には全所員がいずれかの研究に参加することを原則としていますが、後者の共同研究では、本年度で大方の調査を終え、来年度からは論集『瀬戸内海の歴史民俗』をはじめ、各種報告書、資料集、写真集などの成果物を逐次刊行する予定です。これらの共同研究のほか、現在、研究所が取り組んでいる大きな事業としては、1920 年代に渋沢敬三によって創設されたアチックミュージアムソサエティ

を継承した日本常民文化研究所の創立 100 周年記念事業や、日本常民文化研究所の研究成果を広く学生や市民に公開するための博物館構想に関わる事業などが挙げられます。すでに、創立 100 周年記念事業では、財団法人日本常民文化研究所時代の元所員や関係者からの聞き書きを実施するとともに、関係資料の収集を行っています。また、博物館構想は、博物館勤務の経験のある所員を中心に博物館構想推進委員会を組織し、本学における博物館建設の理念や施設の規模、博物館運営に必要な人材などについて検討を加えるとともに、他大学の既設博物館の視察などを行っています。

次に、国際常民文化研究機構の活動では、学外の研究者を対象とした「共同研究（一般）」と「共同研究（奨励）」に採択された第 2 期の共同研究が、2015 年度時点で、4 本進められています。

1. 共同研究（一般）（3 年間）

- (1) 昆班「東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究」（2 年目）
- (2) 加藤班「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」（1 年目）

2. 共同研究（奨励）（2 年間）

- (1) 高江洲班「河原田盛美における本草学的知識から近代勧業的実践の転換に関する研究」（2 年目）
- (2) 小林班「アチック・ミュージアムの調査活動に関する基礎研究—「隠岐」調査の検証・分析と民俗学的考察—」（1 年目）

共同研究（一般）は、本研究所が所蔵する諸資料を利用して、常民文化に関する研究を国際的に発信することを目的とし、共同研究（奨励）は、地域の水産史・地域史や民具などの研究に携わっている研究者のなかで、必ずしも研究条件が十分とはいえない在野の研究者や若手研究者へ研究支援することを目的としています。

このほか、国際常民文化研究機構の活動では、日本・中国・韓国・台湾の各研究所メンバーの参加によって韓国木浦大学校で開催された東アジア島嶼海洋文化フォーラムや、国際常民文化研究機構が主催した国際研究フォーラム「ホモ material 一人と民具と暮らしの国際比較—」などの報告文を収めています。

最後に、本年報の刊行によって、日本常民文化研究所と国際常民文化研究機構の活動内容をご理解していただくとともに、より内容のある年報を作成するためにも、本書に対する忌憚のないご意見、ご批判を賜りますようお願い申し上げます。

2017 年 8 月 25 日

神奈川大学日本常民文化研究所所長
国際常民文化研究機構運営委員長

田上 繁